

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ラマ廟の社会的機能： 宗教に関する聞き取り調査の活用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白, 莉莉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00005979

ラマ廟の社会的機能

— 宗教に関する聞き取り調査の活用

白 莉 莉
内モンゴル大学

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1 はじめに | 3.1.3 語りに見る蘇力格廟 |
| 2 梅棹が見たモンゴル社会におけるラマ廟の機能性質 | 3.2 包頭市のダルハン・モーミンガン旗の百霊廟の復興 |
| 2.1 過剰人口の収容所としてのラマ廟 | 3.2.1 百霊廟の歴史経由 |
| 2.2 固定的な拠点としてのラマ廟 | 3.2.2 現在の百霊廟 |
| 3 ラマ廟の復興と機能変化 | 3.2.3 百霊廟の管理組織の過去と現在 |
| 3.1 オルドス市オトク旗の蘇力格廟の復興 | 3.2.4 百霊廟のラマ僧たち |
| 3.1.1 蘇力格廟の復興 | 4 おわりに |
| 3.1.2 蘇力格廟のチャム会と蘇力格オボー祭祀 | |

1 はじめに

モンゴル人はラマ教に篤い信仰を持っていることはよく知られている。20世紀の著名なモンゴル民俗研究者であるモスタールトは、モンゴル人の信仰生活とラマ教の関わりについて以下のように述べている。「ラマ教はモンゴル人の信仰生活の大部分をなし、宗教行事を営むことは日常生活の真髄にまで信心が深く浸み透り、いかなる日常の行為も宗教的行事を伴わぬ限り、何らの意味も持たないのである。¹⁾」(モスタールト 1986:100-105)したがって、モンゴルの社会文化はラマ教を排除しては把握できないことが多くのモンゴル学者に認識されてきた。

早期のラマ教関係の研究には、橋本光宝(1942)、アントワヌ・モスタールト(1986)、長尾雅人(1987, 1992)、ワルター・ハイシッヒ(1989)、梅棹忠夫(1990)らの成果が取り上げられる。これらの研究者は20世紀の前半期に内モンゴルの各地を走りながら調査研究を行い、特に当時のモンゴル社会におけるラマ教について各々の視点から論じ、それぞれの研究成果は後のラマ教の研究に貴重な参考になっていることは言うまでもない。

20世紀の前半期は国際情勢の影響を受けてモンゴルの各地域は不安定な状況に陥り、社会全体の生産力が低下し、不振な状況が続いた。従って、このような社会全体の不振な状況は、当時の多数のモンゴル人の男子人口はラマ廟²⁾に入り生産活動に携わらない

ことと、ラマ僧の増加による人口出生率の低下などに起因するものだと、モンゴル社会自身に起きている社会問題が取り上げられ、特にラマ廟の存在は一部の学者の批判を浴びていた（王志彬 1943）。

このような言論と対照的に、梅棹忠夫をはじめとする一部の研究者は、モンゴル人の信仰習俗だけではなく、その生産生活におけるラマ廟との関わりの視点で、モンゴル社会におけるラマ廟の機能性質について論じている。本論では、梅棹忠夫が当時モンゴル地域を調査研究しながら作られたフィールドノートやローマ字カード、戦後の研究著作などを参考に、主に梅棹が論じたモンゴル社会におけるラマ廟の機能性質論についてまとめてみることにし、事例研究と合わせて今日のラマ廟の復興及びその機能変化について検討してみたい。

2 梅棹が見たモンゴル社会におけるラマ廟の機能性質

梅棹忠夫は1944年の秋に西北研究所³⁾のエクスペディションに加わり、内モンゴルのシリング地域の中西部地帯を中心に牧畜の調査を行った。梅棹のモンゴルにおける牧畜の研究は、一つの地域を拠点にする住み込みの調査方式ではなく、内モンゴルの中西部の草原地帯を横断して移動しながら大草原に暮らす牧畜民の生産方式、生活文化に対して迅速にそして全面的に調査するという形式だった。そして、その移動調査の過程で、大量なフィールドノート、ローマ字カードなどを書き残し、その研究成果は後に『モンゴル牧畜調査』の中にまとめられている。

彼の研究はモンゴルの牧畜社会の生産生活の全体に触れているが、特にモンゴル社会におけるラマ廟の機能について注目していることが伺われる。そして研究は主に、当時モンゴル社会におけるラマ廟の存在意義についてマイナスの評価が多く見られることに対して、再考の視点で論じている。以下でその具体的な内容について見てみる。

2.1 過剰人口の収容所としてのラマ廟

梅棹によると、ラマ廟はまず「生産力の低い牧畜社会において必然的にもたされる過剰人口の収容所である」と指摘している。19世紀になるとモンゴル社会のラマ廟の数は1200軒以上に達し、ラマ僧の数は全人口の3割を占めるようになった。したがって、20世紀に入ってからモンゴル社会におけるラマ廟の存在についての批判的な意見が多くみられるようになり、特に多数の男子人口が生産に携わらずに、寺院で生活していることは、モンゴル社会の生産力を著しく低下させていると言う見方は多かった。これに対して梅棹は、実は大きなラマ廟では境内に多数の独房があり、そこに個々のラマ僧が住んでいるのだが、彼らは始終実家に帰り、その労働に従事しているのであり、自分で畜群を持っているラマ僧もいたと当時のラマ僧の生活実態を提示している。

梅棹のこの説を強く裏付けたのは長尾雅人の研究である。長尾は人口収容所としてのラマ廟、余剰労働力を送り出している一般のモンゴル人家庭と、また基本的にラマ廟の財源をなしている王侯とその他の富欲者などの要素からラマ廟がモンゴル社会に存在する意義について検討している⁴⁾。彼は、ラマ廟の存在を支えているのはモンゴル社会における富の平均化の問題であると指摘している。長尾によると、人々は別々の方法を以てラマ廟に参加することによって、その宗教的意義を認めるとともに経済的にはその廟を中心として富の平均化が行われていた機関であると分析している。

要するに、ラマ廟はこの社会の富欲なるものから布施を集め、大規模な設備を以て、一般のモンゴル人家庭から余剰な人口を受け入れ、彼らの中で聡明なるものに教育を行ったり、働けるものに廟の雑事を任せたりすることによって、富の平均化が行われるものである。社会全体から見ると富者は廟を媒介として貧者を養っていることとなると鋭く分析している。そして、ラマを送り出す家庭の立場で見ると、社会的尊信や聖職者としての誇りを獲得する目的⁵⁾もあれば、少なくとも家庭における余剰な労働力の養育費が節約できるからであり、ラマ廟の存在は社会的、民衆的、内部的支持の上で成り立っていると分析している⁶⁾。

ラマ廟は元々民衆からの寄進によって、大規模な家畜群を所有していた。それを人民に対する「搾取」ととらえる見方に対して、梅棹は「その家畜群は家畜預託制度によって、多数の零細牧民層を潤していたのである」と指摘している。

梅棹は彼のフィールドノートの中で、零細牧民のことを一つの家庭を単位に「ail」とみて、ノロ・ハサーダというラマ廟の家畜預託の事例について記録している（写真1，2を参照）。

また、モンゴル社会の人口減少の問題について、「ラマ僧は独身生活を送るため、モンゴルの人口が増えない」という批判的な見方に対して、梅棹は、「高位のラマ僧は戒律を固く守っているが、一般のラマの中では、養妹制度というのがあって、女と一緒に暮らしているのがたくさんいる。」と指摘している。

2.2 固定的な拠点としてのラマ廟

梅棹はまた遊牧する牧畜民と固定ラマ廟の間に相互に強い依頼関係を持っていることを指摘している。連綿たる大草原の旅人は、常にラマ廟に泊めてもらったり、遊牧する牧畜民はラマ寺の境内に「バイシン」という木造の家屋を建てて固定倉庫にし遊牧の際に一時使わない物資をそのバイシンのなかに保管したりする。また、ラマ廟の周りに漢人の店などがあり、商品流通の拠点になっていることもよく見られる。

モンゴルの遊牧の生産生活と対照的に、ラマ廟は固定拠点としての機能を果たしていたことについて、梅棹はフィールドノートに以下のことを記している（写真3，4を参照）。

36 11月20日

Noroxalat 130

近所に4-5軒のailがある。
 羊の牧畜は少しのailの家の
 あげられている。

・ Katali
 ・ Oshinjiel
 ・ Nojgr } この3軒が
 羊の近所にある。

サインの語
 je: r x u n は 4 x n i t h
 エと埃のジヤがエと入る
 ころをいふ。冬の中
 冬の間。エは板をかぶ
 せてある。

写真1 梅棹フィールドノート内モンゴル調査資料 8-040

1ロハート、本年8月~~初~~次高野

	馬	騾	牛	羊	羊
原	5	9	46	61	168
合	2	6	29	20	34
子	3	4	23	61	110
信用	1	2	8	8	8
	1	1	2	20	6
織		6	10	22	
		11	30	30	
増		3	8	13	
増		8	13	21	
生産	1	1	8	12	33
		1	3	8	17
現在	2	8	28	17	83
	3	4	21	44	112

写真2 梅棹フィールドノート内モンゴル調査資料 8-041

16

廟はあげられた。(オランボック文)

・ 衆糧・ 粟
 ・ 食物(生皮の) - 羊は多く
 なるたけ、おとせられた。
 夏は廟はあげた。

2ヶ月前の廟はあげた理由は
 あるところをさかすためである。
 オランボック文の羊の
 数は 廟のあげた。

・ banim は 2の 家 2 建てた。

写真3 梅棹フィールドノート内モンゴル調査資料 8-019

16

○ sum の 人 1 人 は 2 の
 家の建設に ~~お~~ した。

他人は使はさない。
 おとせられた。
 他人の品物を入れない。

○ sum の 2 は 2 人 3 畜
 はない。コトロがない、かきし
 友那人を ~~お~~ して建てた。

羊 300-400 羊 + 2
 山羊 4000-10000 羊 12
 羊 300 羊 11 1ロハート

写真4 梅棹フィールドノート内モンゴル調査資料 8-020

取材者：sagidun (40代)

家族の成員に婆 (70代), 姉 (50代), 息子 (ラマ, 30代), 娘 (20代)。

肉食以外の食料は、近くのホルシャ⁷⁾で買うより、遠くの貝子廟の大蒙公司から買ってくる。その代金として家畜をあげる。息子がラクダで積んでくるが、往復の時間は一週間もかかる。主に、白面やお茶を買ってくる。羊毛などを販売して近くのホルシャから布やお茶を少し買う。年に5,6回か、それよりもっと移動することがある。決まった場所はない (家畜の数, 性別もそれぞれ具体的に記している)。

廟に預けるものに、食糧, 粟, 着物など。着物は夏の時期に廟に預ける。廟に預ける理由は、あちこち動き回るためである。そして倉庫の鍵は廟においていく。この倉庫は、昔支那人を呼んできて建てたものであり、個人用のもので、他人に使わせない。(梅棹フィールド資料8の014~020を参照)

上記のように廟に倉庫を建てて、個人用の固定倉庫にする事例は、梅棹のフィールドノートの中にほかにもいくつか記録されている。この倉庫は支那人を呼んできて建てるものもあれば、廟のラマ僧からお金や物資などで買う現象も見られるという。

その他に、ラマ廟はモンゴル社会においては、文字を習う学習機関、医療機関、経済機関、金融機関などたくさんの機能を持っていることを提示している。モンゴル人はラマ廟に通って文字を習い、ラマ教の経典を読んだりする。また病気にかかると、ラマ廟に行ってラマ僧の医者に診てもらいか、家に招きお経などを唱えてもらい、病気の穢れを祓うなど、様々なことでラマ廟を利用していた。規模の大きいラマ廟の周りにホルシャなどが開かれたり、金融機関としてラマ僧が金貸しを営んでいるところもあった。

要するに、20世紀の初期においてさまざまな社会問題に陥って、不振な情勢に直面していたモンゴル社会において、その原因はラマ教とラマ廟の存在に求め、ラマ廟の機能について表面的にとらえ、否定的に批判していた多くの見方に対して、梅棹は実際の調査研究を通して、ラマ廟の機能を肯定的にとらえていることが伺える。“ラマは、牧畜に益こそあれ、害はありません”と断言し、ラマ廟とラマの存在について、自然に完成された遊牧社会において、その一つの全体の中に含まれた切り離すことのできない一部分として位置付けている。

3 ラマ廟の復興と機能変化

中華人民共和国が成立後、一連の社会主義建設の活動が行われ、内モンゴルのラマ教やラマ廟においても多くの改革が行われた。まず、ラマ廟の土地所有権をなくし、大規模な資産を人民公社化し、多くのラマ僧を還俗させて労働者にした。所謂現代国家体制のもとに行われたモンゴル社会の古い要素に対する改革であった。さらに、「四清運動」や「文化大革命」の時期においてラマ廟の建築物や仏像などの資産を大量に破壊し、ラ

マ僧たちに批判闘争を行い、すべての宗教活動は「迷信」として扱われ一切禁止されることとなった。このような社会主義改造の政治運動は約30年間続き、ラマ教とラマ廟に壊滅的な打撃をもたらした。

改革開放の時代を迎えてから、民衆の正常な宗教活動が復活し、ラマ廟などの建築も修繕され、諸宗教活動も次第に復興してきた⁸⁾。近年特に地方行政が率先して地方のラマ廟を修繕したり、増築したりして文化資源として開発し、地方の観光業の活性化を誘導しようとしている。このような背景をもとに、本来は地方において普通の宗教活動地だったラマ廟が、行政側の強力な誘導により、建築規模から宗教活動まで遠近で名の知られるほどの大寺院として発展している現象が見られる。一方で、歴史的に内モンゴルで有数の宗教活動中心地であった有名なラマ廟は、今は逆に復興が遅く、年中行事も途絶え、普通の廟として運営されている現象も伺われる。

本論は、近年地方の地下資源開発の発展と連動して、地方行政の支援で復興され、遠近に大きな影響を及ぼすようになったオトク旗の蘇力格廟と、歴史的に内モンゴルではラマ教の教学基地として名の知られていた百霊廟を取り上げ、二つの事例を対照的に近年のラマ教の復興現勢と地域社会における機能変化について検討し、数百年に渡ってモンゴル人の精神生活を支配してきたと言われているラマ教は、現代化が激しく進まれる今の時期において如何なる形式で伝承され、またモンゴル社会における機能性質には如何なる変化が見られるのかについて検討したい。

3.1 オルドス市オトク旗の蘇力格廟の復興

オトク旗は内モンゴル自治区のオルドス市の西部に位置し、東はウーシン旗と隣接し、南はオトク前旗と境が接しており、西は寧夏自治区のトリゴ県と内モンゴルの烏海市と隣接し、北はハンヒン旗と隣り合っている。旗の面積は約2万km²であり、その中で約85%は天然牧場であり、オルドス市の最も大きい牧畜地域である。オトク旗は6つの鎮、四つのソム、二つの郷からなり、総人口はやく87,853人で、その中でモンゴル族は23,927人いる。旗所在地のウラーン鎮は、同旗の政治、経済、文化の中心地であり、またオルドス市の西部の交通要塞鎮である⁹⁾。

文化建設の面ではオトク旗は2008年以降、地方政府が主導して、地方の新興企業などに投資を呼びかけて、ラマ廟などの宗教活動の基地の修築や保護に取り掛かっている。2008年から同旗は1500万元を投入して、旗の境内にある8ヶ所のラマ廟において修築を行い、3万人のチベット仏教の信徒の宗教活動に便利な環境を提供し、宗教社会の和諧と安定に良好な基礎を確立している¹⁰⁾(中国民族報社 on line)。したがって、近年のオトク地域においては行政側の支持により修繕を受け、復興されているラマ廟と、元の素朴な建物を維持しているラマ廟が混合して存在するようになっている。以下では、現地調査で見ることのできた2008年からオトク旗が投資して修繕された蘇力格廟の復興現勢と

その復興活動が地方にもたらした影響について見てみる。

3.1.1 蘇力格廟の復興

蘇力格廟は、オトク旗の蘇米図ソムの蘇力格ガチャの蘇力格という丘の麓に建てられたラマ廟である（写真5、6）。蘇力格廟は1907年にオトク前旗の第十三代ジャサク・ノヤンの時期に建てられたラマ廟である。このラマ廟は地方の布施者たちが力を合わせて、近くの塩湖の税金をもとに建てられた寺院であるという（Jirgal 2006: 140）。現在、寺院の総務管理人の役を担任しているダルジェニマ氏（1941年生まれ）によると、蘇力格廟を建てることを最初に考え付いたのは、この地方のチョック・ドーレンという牧民であったという。当時、この辺りにはラマ廟がなかったため、旱魃が起きると、ラマ僧を集めてこの近くの丘の上で「オソン・ホルル（水の会）」¹¹⁾を催していた。そのため、蘇力格廟という素朴なラマ廟を建てて、雨乞いの儀礼などを行う拠点にしたのである。蘇力格廟が建立された初期は、30人のラマ僧が常住する素朴な宗教活動の場所であったという¹²⁾。

2001年からオトク旗政府は地方の宗教活動の拠点として、また観光化のニーズに応じて、蘇力格廟の修築に取り掛かった。2005年以降現在の蘇力格ガチャの近くにある中国有数の蘇力格天然ガス田が中国石油長慶支社により開発された。同時に天然ガスの処理工場なども造られ、内モンゴル自治区の大都市と自治区外の大都市に天然ガスを提供している。この会社は蘇力格廟の修築を経済的に支援しており、その貢献は廟の入り口の両側に建てられた記念碑に記述されている¹³⁾。



写真5 蘇力格廟の入り口 2012年7月撮影



写真6 蘇力格廟のソクチン・ドガン 2012年7月撮影

蘇力格廟は、2001年に修築を始めてから、旗政府、地方の各公的機関、企業や個人から大きな支持を集め、2012年の時点で全域が40,000m²、建築面積が10,000m²のラマ廟として再建されている。蘇力格廟は、蘇力格丘を寄りかかるような形で建てられ、正面の麓に舗装道が通っている。舗装道から上に階段で上がっていくと、廟の入口があり、敷地内に宗教活動の各種の施設が置かれている。廟の敷地は長方形であり、入り口から入っていくと、特製の香炉があり、香炉の両側にオルドス・モンゴル人にとって民族のシンボリックな存在となっているスウリデが立っている。香炉の横に並んで、道の側にモンゴルの伝統的なゲルが2つあり、その中にはチンギス・ハーン一族の肖像が祭られている。さらに、廟の敷地の中央にはチンギス・ハーンの銅像が建てられている。13世紀にチンギス・ハーンが率いたモンゴル軍がこの地方を横切ったという歴史出来事を記念するために、こうして廟の敷地の中央に武具を手に持ち、馬に乗ったチンギス・ハーンの銅像が建てられたという(写真7)。チンギス・ハーンの銅像から奥の方に行くと、本堂であるソクチン・ドガンが建てられ、その両側に小さな仏殿や仏塔などが建てられている。ソクチン・ドガンの後ろに仏塔があり、また仏塔の両側にラマ僧たちが泊まる家屋が造られている。

3.1.2 蘇力格廟のチャム会と蘇力格オボー祭祀

蘇力格廟では、現在旧暦6月11日にチャム会が行われている。チャム会は、チベット仏教における仮面舞踊会のことであり、ラマ僧たちが各種の仏像の仮面を被って踊りをする儀礼である。それは、蘇力格廟の後ろの丘の上にある蘇力格オボーのオボー祭祀¹⁴⁾と



写真7 蘇力格廟の敷地内に建てられたチンギス・ハーン銅像
2011年9月撮影

合わせて前後2日間行われ、前の日にチャム会が行われている。蘇力格廟のチャム会は、半日は会堂の中で1人のラマ僧によって行われ、後の半日は外の敷地内で数人のラマ僧によって行われる。こうして、いわゆる堂内チャムと堂外チャムとが行われているのである。チャムの日になると、近くの牧畜民たちは大勢集まるのだが、年配の人々にはおしゃれな民族服装を着てくる人が多く見られる。仮面を被るラマ僧はそのまま供養対象となり、踊っている間に人々は絶えずその背中に頭を付けてアジスを貰い、帯に布施金を挟んで拜む。

チャム会は、現在の蘇力格廟において年に1回行われる行事の一つであり、チャム会の日になると、オトク地域で資格を持つラマ僧が数多く集まり、読経して法具を操るなどして、盛大に行われる様子が見られる。ラマ廟のチャム舞踊の披露は、夏の牧畜地域においても大事なイベントであり、チャムを楽しむために、各地から家族連れの人々が集まってくる(写真8, 9)。

チャムを踊るのは、特定の訓練を受けた若者のラマ僧たちであり、彼らは必ずしもこの廟の出身者とは限らないが、チャムの踊り方を身に付けると、周辺のラマ廟のチャム会などに招かれて踊るのである。夏の時期は、ラマ僧たちにとって大いに活躍する時期であり、各地方のオボー祭祀や湖の祭祀、井戸の祭祀などに招かれて読経を行ったり、



写真8 蘇力格廟のチャム会 2012年7月撮影



写真9 蘇力格廟のチャム会 2012年7月撮影

チャムの訓練を受けた者はまた他のラマ廟のチャム舞踊に呼ばれて踊ったりする。

蘇力格オボーは蘇力格廟後面の海拔1,350mの高い丘の上に位置する。その外見は、石で丸く固定された本台が四角いコンクリート造りの高さ0.8mの土台の上に設置され、本台の頂に灌木の束が挿されている（写真10, 11）。

オボーの本体の四面にはそれぞれ30cm × 2cmの大きさの石碑が張り付けられ、正面



写真10 蘇力格オボー祭祀 2012年7月撮影



写真11 蘇力格オボー祭祀 2012年7月撮影

の石碑にモンゴル語、チベット語、中国語でオボーの名称が刻まれ、その反対側の石碑に、モンゴル語と中国語の両文字を使った『蘇力格オボー修築の功德碑』が縦書きで書かれている(図1を参照)。この功德碑に、オボーの再修築に、オトク旗の党の書記〇〇氏と旗長の〇〇氏が個人のお金を寄付していることが書かれている。

オボーの本台の右と左側に付けた石碑には、オトク旗民族宗教協会は蘇力格オボーに

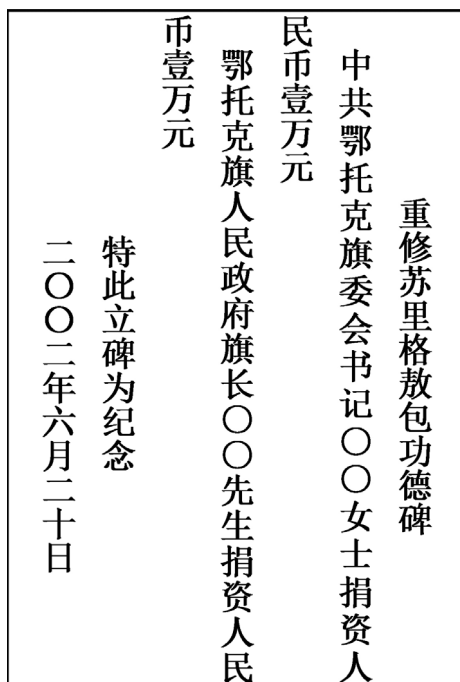


図1 蘇力格オボーの功德碑

関する伝説の内容をモンゴル語と中国語で刻んでいる。蘇力格オボーについて以下のような伝説が伝わっている。

昔、チンギス・ハーンが西夏国を征服するために、モンゴル軍隊を率いて六盤山¹⁵⁾に向かって進軍する途中、蘇力格オボーが置かれている丘の上にモンゴル軍旗の黒いスウリデを祭った。スウリデを祭る儀礼を通して、モンゴル軍隊の意志を固め、闘志を燃やした。チンギス・ハーンは命令を下し、9×9、計81¹⁶⁾頭の羊の丸煮を供物として用意し、盛運の黒いスウリデを祭り、西夏国を征服するまで撤兵しないと軍旗のスウリデに固く誓った。祭祀を終えて、兵士たちに供物を配分しているうちに、丸煮の供物の中に生の肉が一玉現れた。これを見て、チンギス・ハーンは、その生の供物を天から下った特別な恩恵であると言い、この丘の頂に捧げたという。生の肉をモンゴル語で「蘇力格」と表現するため、後に人々はこのような歴史的な出来事を記念するために、丘の上にオボーを建てて「蘇力格オボー」と名付けたのである (Arbinbayar 2001 : 79-80)。

この伝説については、蘇力格廟の総監理人のダルジェニマ氏 (70代)、蘇力格オボーの主宰者のエンゲ氏 (40代)、筆者の現地協力者となってくれたジゲデン氏 (30代) が、皆同じように語っており、地方の人々にとって誇り高い伝説であることが伺える。蘇力格オボーの石碑にもほぼ似たような内容が書かれているが、歴史年代などについて、伝説よりも明確に記述している。

現在の蘇力格オポーから東南に300mほど離れた場所に、元の蘇力格オポーの跡が見える。蘇力格オポーは蘇力格スムが寄りかかる丘の上にあるため、数年前に建て直された時に、元の場所から今の所へ移動した。その時に、蘇力格廟の主たる建物と一直線に並べられ、一見して廟とオポーが整然と並ぶ美しさが求められたのだという¹⁷⁾。

3.1.3 語りに見る蘇力格廟

蘇力格廟の歴史と現状を把握するために、蘇力格廟の総務管理人のダルジェニマ氏、元の行政側の役人や数人のラマ僧に聞き書き調査を行い、一部の生の資料をそのまま提示することにした。

語り①：ダルジェニマ氏（蘇力格廟の総務管理人、70代）

「蘇力格廟¹⁸⁾は、最初に雨乞いを目的として地方の牧民たちが布施を集めて建てたものである。元々丘の正面の麓に造られた素朴なラマ廟だった。自分は4歳でこの蘇力格廟に入った。家族はすぐ近くに住んでいたのだから、兄弟2人の中で、自分がラマ廟に入ってラマ僧になったのである。十何歳になった時に、ラマ廟を離れて20歳まで学校に通った。学校を卒業してすぐ職に就き、38年間働いた。退職した際に、このラマ廟も復活されて、9人の新しい生徒が来たが、本来このラマ廟出身の年配のラマ僧は、私1人しかいない。

子供の頃は、生活も貧しかったし、また兄弟も2人しかいなかったため、ラマ僧にしなければならなかったら、強行的に軍隊に入れられてしまったと思う。軍人になると命の危険があるから、親は自分のことをラマ廟に入れたのだ。また、地元では「一人息子がラマ僧になると、一基の金塔を建てたことと等しい」とよく言われるものである¹⁹⁾。

自分が最初にこの蘇力格廟にやってきたとき廟に30人余りのラマ僧がいた。小さなラマ廟だった。その頃の廟の生活も結構自由だった。先生に声をかければ、自由に家に戻ったりしていた。ここに再び戻れたのは、数年前に政府はこの廟を大規模に建て直す計画を立て、自分ももともとこの寺院の出身だったため、ソムの政府から連絡があって呼ばれたのです」。

語り②：オトク旗の元政協副主任（70代）

「蘇力格廟は1966年に破壊された。自分は当時、20歳ぐらいの青年だった。破壊されるのを、この目で見ていた。廟の経典は焼かれたり埋められたりした。元の廟は、この舗装道の所にあった小さなラマ廟だった。2000年に天然ガス田が発見され、「スミト気田」として開発された。開発に伴って、今の蘇力格オポーが建つ丘は四面に湖に囲まれ自然景色に恵まれているために、旗政府と地方の政府は、この廟を建て直そうとした。宗教活動だけの場所としてではなく、旅行観光地にする目的もあった。自分はその時、再建する企画に参加した。廟の基本建設には2年間かかった。その後も数年かかって廟の周辺の環境の緑化、道路の工事や商業の建物などの建設に取り組んだ。2010年になって、自分もようやくこの職から離れることができた。今は田舎で放牧の生活を過ごしている。

蘇力格廟の再建は政府によって計画されたが、実際に建設する際の経費は主に寄付者の力に頼った。社会の各界からの援助に頼ったのだ。オポーの再建と道路や電気などの工事は、国の建設プロジェクトから援助を受けたが、お寺自体の修築の経費は政府がそれほど負担していない。」

筆者は上記の二方以外にまた数人のラマ僧に対して聞き書きを試みた。聞き書きの過程で、ラマ僧は上下関係を非常に重要視することが分かった。普通のラマ僧は話を聞こうとすると、自分は知ることがあまりないので、自分の先生や先輩やまた上司などを紹介しようとし、内部には非常に謙遜なたたずまいを重視することに気付いた。しかし、一般の民衆からは、常に「バグシ（先生）」と呼ばれ、民衆の間に入って話をするときには物知りとして、何かを語っているのがよく見かける。自分が歩いて回った地域の見聞から、現在世界で話題になっているニュースまで様々な話題について話しをして民衆の注意を惹いている。

特に、蘇力格廟をはじめオトク地域のラマ僧たちは、普段廟に常住するよりは常に読経などの必要で牧畜民たちに招かれたりするため、各地の出来事や情報などを集めてそれをまた人々に語り伝えていくものである。したがって、このように各地を歩き回り宗教関係の仕事をこなす一方、各地の情報や知識を集めて伝播していくことは、牧畜社会におけるラマ僧の一つの大きな役割であり、また常に「バグシ」として尊敬を集める重要な原因である。

現在、蘇力格廟のような規模の大きなお寺にしても、ラマ僧の数から言うと、30人にならない数字で、実はラマ僧は減少しているのは事実である。そして、現在のラマ僧の中で、一部は、子供の頃はラマ廟で暮らした経験を持つため、近年廟を修築する際に行政側から招かれてきた人たちである。このようなラマ僧たちは、高齢の人ばかりで、また子供の頃にラマ廟で暮らした経験をもつが、多くのラマ僧は実際にきちんとした宗教教育も受けないままに還俗させられ、現在はラマ僧としての身分を持つだけで、簡単なお経を唱えるくらいの人たちである。

これに対して、一部の中年層のラマ僧がいる。彼らは少なくとも数年間義務教育を受けて、文字の読み書きができたうえで、ラマ廟に入って弟子入れしたり、あるいは、ラマ教の学校に通って宗教関係の知識を学んだり、一定の基礎知識を身に付けたうえで、また有名な大寺院に留学したりした経験を持つ人たちである。このようなラマ僧たちは、現在のラマ僧の新しい知識階級をなし、現在所属のラマ廟では管理職に就く人が多くみられる。たとえば、現在の蘇力格廟の40代のダー・ラマと、百霊廟の（40代）のダー・ラマ、またオトク旗の珠日和廟のニルバ（30代）が上記の現象を実証できる。

しかし、近代的科学教育を提唱している今の社会において、ラマ僧のような身分とお寺の職を選択する若者は本来少ないし、少子化が進む今後の社会ではラマ僧になる人はさらに減少していくことが予測される。筆者は調査中に、オトク旗の珠日和廟において数人の子供の僧侶の姿を見かけたことがある。当廟のニルバにこれらの子供の僧侶の来歴を聞いてみたところ、不思議な病気にかかったり、或いは不思議な夢を見たりしたことで、ラマ廟に弟子入れすると治ることが告がれ、ラマ僧になったと返事された。しかし、これらの子供の僧侶は、普段は他の子供たちと同じように学校に通って教育を受け

るが、ただ夏休みや冬休みなど学校が長期休みの時期にだけラマ廟に通っているという。

要するに、現在の蘇力格廟は外見的にみると、宗教施設を大規模に修繕し、敷地内にまたオルドス・モンゴル人の信仰に合わせてチンギス・ハーンの銅像、チンギス・ハーン一族を祭る祭殿、仏殿、廟オボーなどを備え、オルドス・モンゴル人の主要な宗教信仰を全て包括している。そこには、宗教活動の中心地としての影響力を拡大しようとする意図が見られ、また将来的に地方の観光業を誘導する際に大きな力を持つだろうとの期待も寄せられていることが伺われる。しかし、その一方で、宗教信仰の代わりに近代的科学知識は人々の精神世界を支配しようとしている今日の社会において、社会文化の中心的な存在ではなく辺縁的な存在となったラマ教とラマ廟文化は今後いかに継承されていくかは大きな問題となろう。

3.2 包頭市のダルハン・モーミンガン旗の百霊廟の復興

ダルハン・モーミンガン旗²⁰⁾は、内モンゴル自治区の19の辺境旗と23の牧畜業旗の一つであり、本来はウランチャム盟の管轄下に入っていたが、1996年から包頭市の管轄下に入り、包頭市の唯一の辺境旗となった。北はモンゴル国の東ゴビ省と隣接しているため、昔から「草原の港湾、陸地の港」と言われている。2012年の統計によると、全旗の人口は約12万人であり、その中でモンゴル人は約10%を占めている。旗全体の人口の約10万人が現在旗所在地の百霊廟鎮に常住している。

ダルハン・モーミンガン旗の主な生業は牧畜業であり、天然牧場を利用した畜産業が発達している一方、近年農耕地の拡大も絶えず進まれ、農産業の中でジャガイモの生産が80%も占め、ジャガイモ生産基地となっている。また豊富な地下資源の埋蔵量があることが報告されている。一方、ダルハン・モーミンガン旗は近年旅行観光業の発展にも力を注いでおり、特に2013年に巨資を投じ、百霊廟鎮新城区や百霊廟ナーダム文化産業園を建設し、同じ年にほぼ2ヶ月も続く初の中国遊牧文化旅游節を開き、同旗の観光業の発展に大きな刺激を与えている（包頭・達茂旗：on line）。旗所在地の百霊廟鎮はフフホト市と包頭市からそれぞれ約150キロと160キロの距離をもつとのことで、呼和浩特市と包頭市の経済輻射圏として、経済の発展が大きく期待されている地域でもある（写真12, 13）。

3.2.1 百霊廟の歴史経由

旗所在地の百霊廟鎮にある百霊廟は、清朝の康熙帝の42（1703）年に建てられ、清朝から「広福寺」と名付けられた。モンゴル語で「バト・ハーラガ・スム」（bat-u kaaly-a süm-e）と呼ばれるが、「頑固たる門」という意味である。最初はダルハン旗の貝勒²¹⁾によって建てられたため、「貝勒廟」とも呼ばれる。「百霊」という名称は、中国語の「貝勒」という発音と似ているし、また噂によると、昔は漢民族の人々はよくこの草原で「百



写真12 上から見た百霊廟鎮の眺め 2014年7月撮影



写真13 百霊廟鎮の女爾山の頂にある革命烈士記念碑 2014年7月撮影

霊鳥」(ヒバリと同類)という小鳥を捕ったりしていたので、「百霊鳥のあるところ」という意味で、後に「百霊廟」と呼ぶようになったという。

上記でも触れたように、百霊廟が位置するダルハン・モーミンガン旗は地理的に、北はモンゴル国へ、西は新疆地域へ通る窓口であり、交通要塞地として昔から兵家必争のところとなってきた。したがって、20世紀の初期からモンゴル国の独立運動、内モンゴ

ルの自治運動、国共両党の動きと日本の介入などの政治事変に関わり、百霊廟は前後三回にわたって大きな被害を受けている。最初の被害事件は、1913年に当時のモンゴル国のジプツォン・ダンバ・ホトクト（哲布尊丹巴呼圖克圖）²²⁾は、内外モンゴルを統一するために、内モンゴルに進軍してきたが、百霊廟辺りで駐屯していた民国の北洋軍閥の軍隊が要塞を捨てて逃走する際に、百霊廟を焼却し、また貴重な物件なども掠奪していた事件である。この事件によって、百霊廟は前後四つの経堂を失うほどの被害を受けたという。その後、民国の総統の袁世凱は内モンゴルのモンゴル人たちを見方にするために、当時の旗王公に巨資を使って1914年から1927年に至るまで13年の時間をかけて百霊廟に修復を行ったという。

1936年に国民党の傅作義將軍の軍隊と当時百霊廟に駐屯していたテムチュクドンロブ（徳王）²³⁾の軍隊が百霊廟の附近で激しい戦争を行い、廟の建物と物資は再び戦争の被害を受けることとなった。戦争の後、また同旗の貝勒によって1939年から2年間かけて修復が行われ、建物を修築し、二つの仏塔を建て加えたという。1963年から始まる「四清運動」と「文化大革命」により、建物が壊され、経典や仏像などが焼却されたり、ラマ僧がお寺から追い出されたりして壊滅的な打撃を受けた。

百霊廟は19世紀にラマ廟は最も栄えた時期には、ラマ僧の数は1200人余りに達したという。中華人民共和国成立の直前にラマの数はまだ500人ぐらいだったという。しかし、1950年代に始まる一連の政治運動や社会主義建設により、特に「文化大革命」を経てから、昔のラマ教活動聖地としての威勢が完全に落とされた状態になった。

文化大革命で破壊を受ける前の百霊廟は総面積が8,000m²を占める「壮観たる廟群」であり、内モンゴルの呼和浩特市の大召寺、包頭市の五当寺、シリング盟の貝勒廟と並び四大ラマ教聖地として名が知られていた。また、百霊廟はシリング盟の貝勒廟とともに、ラマ教の教学部（チョェラ）、秘密学部（ジュツバ）、医学部（マンバ）、時輪学部（ドエンコル）という四分科の学校（モンゴル人はラッサンと呼ぶ）を有している数少ないラマ廟の一つである。この四分科の学部はそれぞれの学堂を有し、各学部に数十数百の学生がおりそれぞれの学堂で勉強し修養するという。この四分科の学堂は大本堂（ソクチン・ドガン）と合わせて五つの部門をなし、またそれぞれ自分の管理組織を持ち、年中行事にも各部に関する内容が多かったと言う（橋本 1942：224-244）。しかし、現在の百霊廟は外観からも内部構造からもすでに歴史上のイメージと異なるラマ廟に変化している。

3.2.2 現在の百霊廟

現在の百霊廟は赤い囲牆に囲まれていて、実用敷地は昔の3分の1しか占めない。廟の前に大道路ができ、道路を挟んで向こう側に市民が活動する広場が出来ている。広場の中心に大きなマニ筒が作られ、地方を代表するお寺の文化をアピールしている。廟の

西側細道を挟んで同旗の博物館の立派な建物が建っている（写真14）。西側の細道を奥に行くと廟の西北に百霊廟鎮の蒙古病院がある。廟の東側に百霊廟鎮の電力局のビルが建ち、廟の後ろは住宅地となっている。広場の端にいくつかの大きな広告版が立ち、その上に党の思想、地域の発展情報や公益広告などを宣伝している。百霊廟、博物館とこの広場が合わせて百霊廟鎮の文化活動中心地を成している（写真15）。



写真14 百霊廟の隣に建つ旗の博物館 2014年7月撮影



写真15 百霊廟の前にある広場 2014年7月撮影



写真16 百靈廟の前に建てられた石碑 2014年7月撮影

百靈廟の正面中央の大門には四大天王を安置している。この大門は通常は開閉せず、左側の小側門から出入りしている。そして右側の小側門の斜め前に一つの石碑があり、石碑の左上に小さな文字で「全国重点文物保护单位」と刻まれ、真ん中に大きい文字で「百靈廟抗日武装暴動旧址」と刻まれている。この石碑は、中華人民共和国の國務院から2006年に公布されたもので、内モンゴル自治区政府から2012年に建てたものである（写真16）。

百靈廟の正面の大門から入ると、左と右にそれぞれ一本の旗杆がある。左側の旗杆に向かい合って、廟の事務室がある。この事務室は百靈廟の事務的なことをする場所であり、また礼拝に来た人々を招待するところである。その隣に昔はラマ教の二大蔵經の一つダンジョルを保管していた経堂だったが、文化大革命で大蔵經は全部焼却されたため、現在は普通の経堂として使われていない。そして、右側の旗杆と向かい合って二つの経堂はあるが、その中の一つは二大蔵經のもう一つガンジョルを保管していたところだったが、今も使われていないままでのいる。

敷地内の中央に本堂のソクチン・ドガンがあり、この本堂は漢式とチベット式が混合された2階建ての建物である（写真17, 18）。本堂の中に毎日のようにラマ僧たちがお経を唱えて法会などを行っている。本堂の両側に近年新築された二つの白い仏塔が建っている。本堂の後ろにチベット式の経堂があり、この経堂は現在百靈廟の唯一残っている教学部（チョェラ）の学堂である。しかし、この教学部の学堂も形式上のものとなり、基本的に使われていない。この学堂に左右二つの小側堂があり、右側の側堂は現在ラマ僧たちの食事を用意する台所となっている。この台所に2人のラマ僧がいて、日頃の食



写真17 百霊廟の正門 2014年7月撮影



写真18 百霊廟の本堂 2014年7月撮影

事の用意をしている。

また、チョエラ堂の両側にそれぞれ数軒のレンガ造りの家があり、そこにラマ僧たちが住んでいる。ラマ僧たちが住んでいる建物は、1980年代に新しく建てられたものであり、本来は百霊廟の経堂などの敷地だったという。

近年、廟の西側にある一部の敷地を取戻し、赤い囲牆で囲み、中に新しい漢式の経堂



写真19 百霊廟の近年増やした新築 2014年7月撮影

を建てた。この敷地は本来百霊廟のものであり、元々の経堂において1932年に第九世バンチェン・エルデニが訪れた際に利用されていたという。バンチェン・エルデニは百霊廟で2ヶ月も滞在し、時輪学部（ドエンコル）の教学を行ったという。元の経堂は一時隣の蒙医病院に薬剤の倉庫として使われていたが、蒙医病院は近いうちに郊外の広い場所に移動する計画であるため、敷地をまた百霊廟に戻したという。そして、古い経堂を打ちこわし、現在の新しい建物を建てたが、まだ利用していない（写真19）。

廟の左側にもう少しの敷地があるが、そこは昔百霊廟の一つの学堂が置かれていた場所だったという。近年、百霊廟の管理人のダー・ラマたちが自ら主張して、チベット式の住宅を作り、今のラマ僧たちに住まい処として提供しようと努めている。この行為に対して、年配のラマ僧たちは「ラマ廟の敷地にラマ僧個人の住宅を建てることはありえないものだ」と反対の意見を取っている現象も見られる。

3.2.3 百霊廟の管理組織の過去と現在

上記で触れたように、百霊廟は元々本堂と四つの学堂を合わせて五つの部門からなっていた「廟群」だったという。そして、各部はそれぞれの管理組織を持ち、年中行事も個々で行っていたという。まず、大本堂の過去の管理組織を具体的に見てみる。

表1 過去の大本堂の管理組織²⁴⁾

職 位	人 数
シレート・ラマ	1人 (一山の座主)
ダー・ラマ (達喇嘛)	1人 (一山の執事格にして実権を有する有徳ラマ)
グスクヒ (格斯貴)	2人 (威儀奉行)
オンザト (経頭)	2人
ニーラブ	2人 (大本堂倉庫管理者)
デムチ (徳木斉)	8人 (法要準備兼管理者)
デムーチ	12人 (デムチの補助者)
ビチクチ (書記)	1人
ハニル (清掃者)	1人
ジャーマ (給茶)	1人
ゴンニル	3人 (大本堂の鍵持)
シャビ (沙弥)	1人 諸般の用に使走さる

大本堂の他に、各部も個々の管理組織を持っているが、職位的に大本堂と比べると、ダー・ラマ、デムチの職位が置かれていないだけで、基本的に大本堂のそれと変わらないものである。ただ部長の名称は各部によって異なる。例えば、教学部の場合、部長は「サニット・ラマ」であり、秘密学部の場合「ジュットバ・ラマ」であり、医学部の場合「マンバ・ラマ」であり、時輪学部の場合は「ドエンコル・ラマ」と呼ばれている(橋本1942:224-231)。

したがって、現在の百霊廟においては、昔の四つの学部はすべてがなくなり、ただ一つの教学部のチョェラ堂も形式上に残っているだけで、学部自体の運営も停止されているという状態である。要するに大本堂だけが現在数人の管理人のラマ僧によって維持されている。管理組織を具体的に見てみると次の表のようになっている。

表2 現在の百霊廟の管理組織²⁵⁾

職 位	人 数
シレート・ラマ	1人 (昨年逝去)
ダー・ラマ	1人 (40代)
オンザト (経頭)	1人
グスクヒ (威儀奉行)	1人
ニーラブ (倉庫管理者)	1人
ゴンニル (本堂の鍵持)	1人

現在、百霊廟に所属するラマ僧は十数人しかない。つまり、ラマ僧の中で半分ぐらいは管理職位に就いていることになる。今のダー・ラマの話によると、数年前にお寺の管理組織は管理委員会と言われ、その委員会に行政側の役人も参与していたという。しかし、これらの役人たちは百霊廟の宗教活動やラマ僧の生活の改善に何一つ貢献したこと

がないが、逆に廟の財経に様々なトラブルを起こしたと言う²⁶⁾。

百霊廟の規模の縮小したことは、単に管理組織に現れているだけではなく、年中行事にも大きな変化をもたらした。1930年代の百霊廟においては、大本堂が主催をする法会だけは1年の始まりから新年会、祈祷会など年に8回ほど行われ、法会によって種々なチャム（跳舞）が伴われていた。また、四つの学部はそれぞれの法会もあり、四季に渡って様々な宗教行事が行われていた。特に、夏の旧暦の6月に行われる大祈祷会には降服跳舞という数種のチャムが登場し、最も盛大に行われていたという（橋本 1942：245-252）。

現在の百霊廟は、数年前にまだ旧暦の1月13日～16日にかけて大祈祷会が行われていたが、現在ラマ僧の人数が足りないと言うことで、法会の規模も縮小しているという。旧暦の3月の中旬に時輪金剛の法会はあり、元通りに行われていると言う。旧暦の9月22日に大威徳金剛仏の祭祀会が行われていて、廟のすべての仏像を再生する法会だったが、現在は中止となっている。現在は毎日一時間ぐらいの読経会は維持されているが、数多くの法会は、人手不足となったり、できる人は少なくなったりしてやむを得ず中止される状態になっている。特にチャム舞踊は完全に姿を消している状態になっている²⁷⁾。

3.2.4 百霊廟のラマ僧たち

百霊廟は現在ラマ僧の数からいっても、宗教活動から言っても昔と比べものにならないものとなっているが、地域のラマ教信徒たちにとっては相変わらず大きな精神的な頼り処となっており、毎日廟を訪れる信徒は途絶えないことはまた事実である。したがって、何故このような歴史のある「全国重点文物保护单位」としてのラマ廟の復興活動は現在のように遅くなっているのか、また今後は如何に維持されていく傾向が見られるのか、現在のラマ僧たちの生の声を記述しながら検討してみる。

(1) 百霊廟のダー・ラマ（40代）に対する聞き書き

「1994年に百霊廟に来たが、2009年からダー・ラマの職に就いた（写真20）。廟の状況は、自分が1994年に来た時からそれほどの変りがない。建物の建設から言うと、ソクチン・ドガン（大本堂）の西側にある敷地は、近年隣の蒙医病院から取戻し、囲牆で囲み新しい堂宇を建てなおした。この堂宇の元の建物は文化大革命で破壊されたが、昔は1932年にバンチェン・エルデニが滞在の際に利用していたため建てなおした。また、ここ2～3年、我々ラマ僧たちは努力して、ソクチン・ドガンの左側にある敷地も囲み、その中にラマ僧たちの住宅を建てている。それも昔は百霊廟の敷地の一部だった。

廟の日頃の運営とラマ僧たちの生活は基本的に念経をして布施者の寄進に頼って維持されている。地方の行政側は建物などを少し修築したりしたが、廟の運営などに特に援助というものがない。昨年（2013）百霊廟は2ヶ月も及ぶ長期ナーダム大会が開かれ、それをきっかけに、廟の入場券も一時販売されることになった。しかし、ナーダム大会が終了後、入場券



写真20 百霊廟の現任ダー・ラマ 2014年7月撮影

の販売がなくなり、その入場券の販売で入ってきたお金も行政側の役人に取られてしまい、百霊廟の財政には入ってこなかった。

現在百霊廟は正常に運営され、ラマ僧たちの念経は毎日行われているが、ただ昔の法会やチャム（跳舞）会などの行事はまだ復活されていない。自分がこの百霊廟に来てから、チャム会は一度も行われたことがない。50、60年代ごろからなくなったと聞いている。他のラマ廟のような大型な廟会などはないが、自分たちのラマ僧による読経会は普通にやっている。

自分がダー・ラマの職に就いたころ、行政側の役人が派遣されてきて百霊廟の管理委員会を組織して、廟の運営に関わろうとしていたが、結局、廟にいろいろな経済的なトラブルを起こし、何の役にも立たなかった。実際にこの廟の運営など、またラマ僧の生活などには関心を持つものではなかった。実は、中国共産党の宗教政策は我々宗教者のことを尊敬して、我々の利益を保護しようとしていると思うが、様々な問題が起きているのは地方の行政側で務めている役人たちの問題だと思う。

我々宗教者も普通にラマ廟で念経をして、民衆に対して福を積み、社会安寧を祈祷して真の宗教生活に念じたいので、ラマ廟の運営などに関しては、特に行政側に期待しているわけではない。ただ、今の廟の中の消火設備は旧くなり、本当に火事などが起きたら危険だと思って、それを最近行政側に改善してもらいたいと申請している。

普段百霊廟にやってくる参拝者に牧畜民が多い。一部の牧畜民は福を積むことを目的で1,000本の法灯を捧げる²⁸⁾。1,000本の法灯を捧げる儀礼は、参拝者側としては、家族の生活の安寧、家畜の繁盛などを願って行うものであるが、深いところでは仏教の因果応報の理念が説かれる。

現在ラマ僧が少ないことも現実である。百霊廟に所属するラマ僧は数的に10数人しかいないが、今後もだんだん少なくなっていくだろう。特に旧暦の5月13日はオボー祭祀が多いので、祭りに読経するラマ僧は足りない現象が起きている。

「1984年から百霊廟が宗教生活を復活したのだが、まだラマ僧が数人しかいなかったようだ。1989年に正式に開光儀式が行われ、昔還俗されたラマ僧は次第に廟に集まってきて、多いときは30数人ぐらいもなったという。その後、年取って帰宅したり逝去したりして、減少している。」

(2) 年配のラマ僧 (80代) に対する聞き書き

「11歳 (1945年頃) の時からこの百霊廟に入った。念経の為に廟に入ったが、廟に親戚もいた。兄弟5人いたが、自分は上の兄についてきた。16歳に還俗して学校に入った。百霊廟で簡単な念経の知識を学んだだけで、大したもの勉強していない。ラマ僧の身分を恢復したのは、86年ごろのことだった。自分は60歳近くなり、自ら廟の生活を求めて戻ってきた。今家族は孫一家の3人で4人家族だ。」

自分が子供のころの廟の生活は非常に厳しかった。毎日の念経にちゃんと出席しないと、グスクヒにしかられる。遅刻などをしたら厳しい体罰が与えられる。今のラマ僧の生活は昔と比べて楽になった。

当時は、ラマ廟に家畜群がいた。ラマ廟は実に大規模の家畜群を有していた。うちの廟の場合、5つのラッサン (部門) がおり、ラッサンごとに自分の家畜群がいた。廟の家畜群は、この付近に住む貧しい牧畜民たちに委ねて、放牧してもらっていた。50年から八路が入ってきていろいろあって、また58年ごろに「大鍋飯」運動などが起きて、お寺の家畜群は大分減っていった。

当寺、廟の近くにたくさんの家がいた。主に廟のラマ僧たちだった。売店などもそれほど多くはなく、2軒ぐらいあった。また、仏像などを描く画家がたくさんいた。主に漢人たちだった。当時、この百霊廟鎮にはただ百霊廟だけあり、他には何もなかった。廟にいつも若い人がたくさん集まっていた。年寄の牧民たちは法会やチャム会などの時期に集まってくるが、普段は放牧に従事していた。若い人たちは、廟に集まり、念経したり、廟の仕事などを手伝ったりしていた。

自分が百霊廟に弟子入りした時に、まだ500人ぐらいのラマ僧がいた。裕福な人もおり、貧乏な人もいた。皆で裕福ということもないし、皆で貧乏ということもない。有名なラマ廟だったから、たくさんラマ僧がいた。百霊廟には5つのラッサンがいたが、チョェラ (教学部) を習う人が多かった。毎日の読経に参加するのはほとんど若いラマ僧たちだった。年配のラマ僧は、廟の管理などに携わり読経にはあまり参加しない。今のように、年配のラマ僧と若いラマ僧たちが一緒に読経することはなかった。」

(3) トブテン・ママ (70代) の取材

このトブテン・ママは昔百霊廟の管理職に就いた履歴をもつ年配のラマ僧である。現在毎日廟に通っていないが、地元で物知りのラマ僧として人々に「トブテン・ママ」と親しまれている。モンゴル人は普段ラマ僧のことを名前その後ろに「ママ」とつけて呼ぶ習慣がある。

「自分が7歳にチナルト廟 (同旗のラマ廟) に弟子入りしてラマ僧になり、9歳の時に百

霊廟に来た。1954年に13歳でグンブム（青海省の塔爾寺）に行ってチョェラを学び、1959年に戻ってきたが、そのまま還俗した。80年代になってまた再びお寺に戻った。

百霊廟は、文化大革命の時にひどく破壊され、多くの経典や仏像がなくなり、廟は基本的に空になってしまった。現在のソクチン・ドガン（大本堂）は当時、軍隊の武器などを保管する倉庫として使われていたため、そのまま残された。廟に唯一の青銅で作られたマラザ仏の仏像（時光仏）が残留したが、それも2008年からは行方不明になった。

百霊廟が最も栄えた時期は、1500人のラマ僧がおり、マンバ（医学部）、ドエンコル（時輪金鋼学部）、チョェラ（教学部）、ジョットバ（密宗学部）など四つのラッサン（学堂）がいた。チベットや青海省からも有名なラマ僧がこちらに派遣されてきて教学などをしていたという。その中で一番有名なのは、1932年に9世バンチュン・エルデニがやってきて、ドエンコル（時輪金鋼）の学問の講座を開いたことである。国家の偉い人としては、1964年に鄧拓（著名な新聞記者）という人物が来て、詩を書いて贈り物とした。

解放の前に、この百霊廟鎮附近の牧畜民たちは、廟の家畜群を放牧して暮らしていた。当時の百霊廟は数多くの家畜群を有していた。五つのラッサンは、それぞれ自分の家畜群を有していた。1958年に人民合作社ができ、百霊廟の近くの牧場はいくつかの合作社の牧場に分けられた。そして牧場の家畜は全部百霊廟の家畜群から配分されたものだった。

元々百霊廟辺りで有数な裕福な牧畜民を除いては、普通の牧畜民は皆廟の家畜群を放牧していた。よく働いてくれる牧畜民に対して、廟から食肉や家畜の皮などの奨励物を与えていた。家畜を損ねた時に家畜飼いの人を懲罰する。当時、各ラッサンのニルバが家畜群を確認する職を担当していた。優しいニルバに出会った場合、許してあげることもあった。

現在、このラマ廟は国営なのか、私営なのか非常に疑念に思われているようだ。ラマ廟というものは、本来は民衆の寄進や布施によって維持されているものだ。数年前に百霊廟の地税局の職人が廟にやってきて、土地税を徴収しようとした。この廟が出来て400年近く経っているが、地税局が成立して長くとも60年の歴史を持つ。一体どちらが土地税を支払うべきかと弁論して、自分が納めなかったという。」

上記で百霊廟に現在も通っている2人のラマ僧と、元管理職に就いていたトブテン・ママに対して取材を行った。現在取材しうる対象者は、最も年配者にしてもその記憶は1950年代ころまで辿れる。要するに、取材者の記憶を通して百霊廟の歴史を1950代まで復元してみても、当時の百霊廟はまだラマ教の四つの学部を具え、500人ぐらいのラマ僧が活躍していた宗教活動地だった。毎年チャム会などの法会が行われ、佛教活動聖地としての影響を発揮していた。しかし、社会主義建設時代に入ると、先ず10代の若いラマ僧たちはお寺を出て学校に入り、近代教育を受けるようになった。それ以外のラマ僧は実家に帰らせ、普通の労働者に変化する。

1984年に国家の宗教政策によって宗教施設の正常運用が許可され、したがって内モンゴルにおける数多くのラマ廟はこの年に宗教活動を復活し始めた。つまり、ラマ廟の宗教活動が復活されて今までちょうど30年になる。現在の百霊廟は、日頃は念経を怠らざり、願いことを抱いてきた礼拝者たちに念経を以て応えたりして、宗教者としての祈祷念経を怠らない。ただ昔のような大規模なチャム会などが行われなくなり、四つの学

部の中で現在はチョェラを学んだラマ僧が数人いるだけで、他の学問はすべて中断されている状況である。

1932年に九世パンチェン・エルデニは百霊廟を訪れ、ドエンコル（時輪金剛）学の教学を行ったことは、百霊廟の内モンゴルのチベット仏教界における地位を充分裏付ける記念ごとであり、現在も同寺のラマ僧たちの誇りになっている。しかし、2013年から百霊廟鎮のナーダム文化産業区において、7月12日から9月7日に至るまでの約2ヶ月に渡るナーダム大会が行われ、オボー祭祀などの様々な文化活動が行われているにもかかわらず、ダルハン・モーミンガン旗の歴史文化のシンボリック的存在としての百霊廟は、ただ臨時的に入場料の制度が設けられただけで、法会など宗教文化の活動が復活できていないことが事実である。

4 おわりに

今日の内モンゴルの牧畜社会は、単なる遊牧型の牧畜社会から定住型の牧畜社会へ転換している単純な変貌だけではなく、豊富な地下資源の埋蔵量が次々と発見され、草原の至る所で資源発掘が行われているという現状に直面している。また近年、発掘された原材料の加工による工業化は内モンゴルの各地に激しく進まれ、内モンゴル自治区は中国の「清潔エネルギー輸出基地」として位置付けられるようになった。このような近代化建設は地域社会の伝統的な生産方式に大きな刺激を与えることはもちろん、地域の文化産業にも大きな影響をもたらしている。

牧畜社会の余剰な労働力の収容所は今度ラマ廟ではなくなり、地方で新しく建設されている郷鎮やその辺りの新興の工場などにとって代われた。また、肉製品のマーケットの拡大により、自然に頼った放牧の生産方式は、次第に「舎養」という専用肉産方式にとって代われ、伝統的な牧畜産業は生産方式の転換期を迎えていると言っても過言ではない。

近年、内モンゴルの各地にモンゴル族の伝統的な文化習俗や宗教活動が復活されているにも関わらず、ラマ廟の復活において行政側の必要に応じて観光業の発展可能なものと、行政側に直接経済的利益をもたらさないものと分別され、これらのラマ廟の復興状態は実は行政側の関わりによって大きく違っていることが伺われる。

また、近代的科学教育が唱えられる現在のモンゴル社会においては、ラマ教は歴史的に社会文化の主流をなす存在から、伝統文化を代表する辺縁文化へと変わり、今後宗教活動の伝承などの問題も今のラマ廟が直面する大きな問題であることが予測される。一方で、生活の安寧と家畜の繁盛を願うモンゴル人牧畜民の精神生活においてはラマ教とラマ廟は未だに欠かすことのできない存在であることは、現在の普通の宗教活動地として運営されている百霊廟の事例から十分裏付けられるのだろう。

注

- 1) モスタートは、オルドス・モンゴル人の日常生活における宗教行事を事例に、モンゴル人のラマ教に対する篤い信仰心を描いている（モスタート 1986：100-105）。
- 2) モンゴルでは、チベット仏教のことをラマ教とも言い、ラマ教の寺院のことをラマ廟と言い、ラマ教の僧侶のことをラマ僧と言う。また内モンゴルではラマ廟のことをモンゴル語で基本的に「スム sūm-e」と表現している。周知の如き、ラマ教はモンゴル地域に伝播したのは16世紀の後半からであり、当時はトゥムト（土黙特）部族のアルタン・ハーンは、オルドスのジノンの協力を得てモンゴルにチベット仏教を導入し、ラマ教の寺院を建立し始めた。ラマ教の普及にしたがって、多くのモンゴル人はラマ教の篤い信徒となり、モンゴルの各地で数多くのラマ廟が発生した。特に清朝の成立後、清王朝は民族宗教政策の一環として、モンゴルにおけるラマ教を手厚く保護し、ラマ廟の建立や宗教的活動を強く支持した。
- 3) 1944年の春に、内モンゴルの日本軍占領地で少数民族工作を担当していた善隣協会の調査部を改編する形で大東亜省管轄の研究所として設立され、主に満州・蒙古一帯の生態学・民族学的調査を業務にしている。
- 4) 長尾は「ラマ廟はモンゴル草原に堂々として存在していることは、単に清朝など国家的権力によるラマ教奨励やラマ教保護政策に由来するのみではない」と断言している。
- 5) ラマ僧にしては、お寺に弟子入りすることは、「一天出家すれば九族昇天」の可能性もあり、これが一方で当時のモンゴル社会における学問への追求の側面が反映され、王侯も凌ぐほどの栄達もラマとなつてのみあり得ることが説かれている（長尾 1992：178-179）。
- 6) 例えば、兄が1人で処理し得るほどの家畜数であるならば、その弟は家庭に不必要な存在であり、ただ徒食するのみとなる。それで、この弟は、軍人、巡査、役人やラマの中で、いずれか選んで生計を維持するのは当時の現実であるが、親たちにしては、子供を軍隊に送るよりもラマ廟に弟子入れさせることは最も望ましいことであった（白莉莉 2013：152-174）。
- 7) ホリシャというのは、漢人による商業的搾取から牧民たちを救済するために、日本の後押しで作られたもので、いわば、牧民たちの購買販売組合である。
- 8) 特に1985年から1995年の間に、行政側から資金を集めて内モンゴル自治区において23軒の重点なるラマ廟を修繕し、49軒の一般寺院を修繕したという。
- 9) オトク旗はオルドス市において天然牧草地の面積が最も広く、総合的に牧畜を生業の中心とする地域である。地理的には南から北の方に延び、広い土地に渡って各地方の自然、気候と資源もそれぞれ異なるものである。したがって、近年経済発展計画の一環として政府は、地方の自然条件と生業の特徴などに合わせて発展計画を立てることに専念し、その結果、同旗において牧畜経済区域、農耕経済区域、工業経済区域と観光業の開発を目指す生態保護区など数種類の経済区域が誕生した。また、同旗は広い天然牧畜地を有する一方、豊富な地下資源を所有し、近年その開発がどんどん進められている。それに、土地が広く人口密度が低いという特徴もあり、地下資源の開発を下に、大規模な近代的な企業経済の導入が推し進められている。現在オトク旗の西の棋盤井鎮周辺には、近年、工業経済区が成立し、それが同地域の工業や経済の中心となっている。また、同旗の豊かな自然環境をもとに観光業を開発する目的から、現在のオトク旗の北に西オルドス自然保護区などが設置されている。これは、近年の現代化の波に乗って、典型的な牧畜地域は徐々にいくつかの経済産業区が立ち並んだ地域へと変貌しつつある現状を示している。
- 10) 隣のオトク前旗も同じ2008年から民族事務局は「積極的に各級政府に寺院（ラマ廟）の修繕費と社会各界の支持を呼びかけ、多方面から寺院の修繕費を集め、現にある合法的な宗教活動の場所を補修し、徐々にラマ僧の生活補助金を引き上げる」ことを提唱している（オルドス市人

民政府：on line)。

- 11) ラマ僧を招き、雨乞いの儀礼を行う会を「水の会」とも表現する。
- 12) 2012年7月に行ったダルジェニマ氏へのインタビューによる。
- 13) 近年、ラマ教の寺院やオボーなど再修築された宗教施設には、ほとんどの場合、記念碑が付けられている。そこには、修築の際に支持と援助を提供した地方政府、公的機関、地方の企業などの功績が明記されるのが一般的である。
- 14) モンゴルの牧畜民は、土地の神の依り代として故郷の神聖視される崇高な山岳や河といった自然景観が荘厳な場所を選定し、石や土、灌木などを積み重ねてできた造営物をオボーといい、それに対して毎年定期的に行う祭祀のことをオボー祭祀という（白莉莉 2013）。
- 15) 寧夏回族自治区南部の固原市の西南に位置し、昔はシルクロードの北へと通じる道であった。ここは歴史的に見ると、北方民族と中原民族の文化が接触する場所だったと言える。
- 16) 「9」という数字は、モンゴル人にとって特別縁起の良い数字であり、チンギス・ハーンは特に9という数字を好んだと言われている。
- 17) 現在の主宰者エンヘ氏（40代）へのインタビューによる。
- 18) この蘇力格廟の廟オボーの蘇力格オボーは、700年余りの歴史を持つ。当時チンギス・ハーンが軍隊を率いて西夏国を攻撃する途中、今のオボーが置かれた丘の上で、9×9、計81頭の羊のシューズ（丸煮）で軍旗のスリテを祭り、軍隊の気力を上昇させ、戦場に赴いたという。この歴史を記念するためにオボーを建てた。しかし、オボーと対照的に、蘇力格廟は歴史がそれほど長くない。100年余りの歴史を持つだけである。
- 19) 中華人民共和国成立するまでの間、モンゴル地域のラマ僧は特権階級であり、すべての税金から免れ、宗教儀礼以外には一切の社会的な義務を負わない存在であった。
- 20) 全称はダルハン・モーミンガン連合旗で、本来はダルハン旗とモーミンガン旗という二つの旗が、中華人民共和国が成立後の1950年に合併されてできた旗である。
- 21) 多羅貝勒の略であり、清朝の皇族に与えられた第三等の爵位。
- 22) ラマ教界のモンゴルにおける第一人者であり、モンゴル人は一般にウンドゥル・ゲゲン（高位の光明者の意）又はボグド・ゲゲン（聖光明者の意）とも呼ぶ。
- 23) (1902-1966年) 内モンゴルにおけるモンゴル独立運動の指導者。通称徳王。1930年代から日本軍に協力し、モンゴル人の独立政権蒙古聯合自治政府の主席を務めた。
- 24) 橋本（1942：224-231）を参考に筆者が作成したもの。
- 25) 現任のダー・ラマに対する聞き書きにより筆者が作成したもの。
- 26) 近年百霊廟においての銅像の仏像がなくなったことと、臨時入場券の収入が廟の財政に入っていないことなど、様々な複雑なことが起き、ラマ僧たちの怒りを買っている。
- 27) 元管理職に就いていたトブテン・ママに対する聞き書きにより。
- 28) 筆者が現地調査に訪れた当日も、兄弟数人で一緒に1,000本の法灯を捧げるために百霊廟にやってきている牧畜民たちが見えた。

参考文献

(モンゴル語)

Arbinbayar, Sunam

2001 Otog-un Obuga Orod, Öbör Monggol-un Yeke Surgaguli-yin Keblel-ün Qoriya, Honhot.

Jirgal

2006 Üjjesgülengthü Saiqan Šürhei, Öbör Monggol-un Soyul-un Keblel-ün Qoriya, Hailar.

Jorigtu

2000 Borqan Šašin Soyul medelge-yin Asagulta Qarigulta, Liaoning-un Monggol Ündüsüten-ü Bagši-yin Surgaguli Keblegölbe, Shen yang.

(日本語)

梅棹忠夫

1990 『梅棹忠夫著作集』第2巻 (モンゴル研究), 中央公論社, 東京。

長尾雅人

1987 『蒙古ラマ廟記』, 中公文庫, 東京。

1992 『蒙古学問寺』, 中央公論社, 東京。

ハイシツヒ (海西希)

1989 『西藏と蒙古の宗教』, 耿昇訳, 天津古籍出版社, 天津。

白莉莉

2013 『モンゴル族のオボー信仰の持続と変遷—内モンゴルオトク地域の事例を中心に』, 神奈川大学歴史民俗資料科学研究科博士学位論文, 神奈川。

橋本光宝

1942 『蒙古のラマ教』, 仏教公論社, 東京。

モスタールト, アントワース

1986 「オールドス・モンゴルに関する民俗資料」, 村上正二訳, 『モンゴル研究』17: 81-106。

(中国語)

鄂托克旗誌編纂委員会

2004 『鄂托克旗誌』, 内蒙古人民出版社, 呼和浩特。

鄂托克旗人民政府

「鄂托克之窗」 <http://www.eq.gov.cn> (2012/6/27アクセス)。

宝貴貞

2008 『近现代蒙古族宗教信仰の変遷』, 中央民族大学出版社, 北京。

胡日查著

2013 『清代蒙古寺院管理体制研究』, 遼寧民族出版社, 沈阳。

Henning Haslund 著 徐孝祥訳

2013 『蒙古の人和神』, 新疆人民出版社, 烏魯木齊。

王志彬

1996 (1943) 「如何整理伊克昭盟」 『鄂托克前旗文史資料』第十六輯, 政协鄂托克前旗。

周晋熙

1989 「鄂托克(オトク)富源調査記(1928)」 『鄂托克前旗文史資料』第十輯, 委員会文史出版, 鄂托克前旗。